

〔 研 究 ノ ー ト 〕

いま教育を

柿谷 悟

目次

- I. はじめに
- II. 反省に立って
 - 1. 戦後の教育
 - 2. 科学文明に対する不安
- III. 教育を問い直す
 - 1. 教育の目指すもの
 - 2. 研究と教育
 - 3. 個性ある教育
 - 4. 心の教育
 - 5. 社会道義の確立
 - 6. 国の存立
- IV. むすび

いま教育を

柿谷 悟*

I. はじめに

長年、念頭から離れることのなかった教育の問題について、おおまかではあるが強調したい点を取り纏める事にしました。

戦後と言っても、はや半世紀が過ぎました。日本は経済大国と謳われるようになり、世界の各国から羨望の目で見られるようになりました。この経済的繁栄のもとには教育があると、欧米諸国からも注目されることとなり、我が国の教育界からも自賛の声が聞かれました。戦後の復興、経済の発展は、確かに教育によるところが多々と思います。経済発展は、日本をして否応なしに国際社会の舞台へと押し上げる結果となり、今や国際関係を抜きにして日本の進む道はありません。

戦後の混乱からようやく脱却して、経済の上昇期に差しかかった時、大学紛争はまさに頂点に達しておりました。華々しかった一大動乱も、なんとなく峠を越してからは結論を得ない俣に、何時ともなく鎮静化してしまいました。

経済の復興により、一躍国際社会に仲間入りした日本にとっては、困難な国際問題が待ち構えておりました。また国内においては、戦後政治・経済の転換期にあたり多くの難問を抱えており、まさに日本の進路が大きく問われている時であります。国内問題としての当面する政治・経済に真剣に取り組むべき事は言うまでもありませんが、それにもまして大切なのは教育の問題であります。日本の進路を決める大きな基準は教育にあります。教育の道標を早急に明確にし、日本の教育のあるべき姿を鮮明にすべき時であります。ここにおいて、戦後教育の反省に止まることなく、明治この方100年に及ぶ教育について問い直す好機かと思えます。戦後教育の功罪については多くの論者がいるし、また教育改革が叫ばれてからも久しい。しかし未だに、教育の本質に関わる論調は希薄なように思われてなりません。

いま日本は大きな曲がり角に立っております。一大変革期にあります。この大変革期に当たって、今こそ教育の本質を問い直し、よき伝統は残しつつも、改めるべきは右顧左眄することなく改めて、新しい日本の教育を推進すべきだと思います。

ここで誤解がないように一言申し述べたいことは、私は、戦後の教育の全てを否定している者ではありません。その成果を高く評価している者の一人でもありますが、ただどうしても看過できない肝心の点について、主に学校教育をここに取り上げました。

* 岡山理科大学 理学部教授 (大学教育研究センター客員研究員)

II. 反省に立って

知識教育の一大成果としての現代文明のすばらしさ、ことに今世紀における科学技術の進歩はまさに目覚ましい。しかし東西冷戦の終結とともに私達は、物質的な豊かさの中にあっても、また素晴らしい科学技術のもとにおいても、またどの様なイデオロギーによっても、人間は必ずしも幸せになれないことを知り始めて来ました。

1. 戦後の教育

敗戦後の日本は復興の為に、第一に物的な豊かさを追求して来ました。そしてまた社会の凡ゆる分野において、平等と平均化の変革が進み、知識の画一教育が行なわれて今日に至っております。この戦後教育の特質は、敗戦後の日本においてはやむを得ないことであったと言えばそれ迄であります。余りにも問題が大き過ぎると思います。

ところで人間は、それぞれ異なった個性を持って生まれてきます。また人間の成長には、知識と共に心の教育が絶対に必要でありまして、調和のとれた教育があってはじめて本当の教育が存在するのです。その片方を軽視し抜きにしたような戦後教育は、まことに片手落ちな教育であったと言わざるを得ません。

さらに最も誤ったところとして指摘したいのは、イデオロギーに裏付けされた俗に偏向教育と言われたものが、学校においてなされたことでもあります。そして余りにも強引過ぎた平等・平均化された教育が、偏った精神教育と一体となって、本来の教育を損ね、学校をして内部から崩壊させました。この影響はなんとも計り知れない程の大きなものがあります。

2. 科学文明に対する不安

科学技術を謳歌する近代社会においては知識は重視され、知識教育のみが教育であるかのような錯覚に襲われ勝ちです。科学は近年、目に見えて進歩し、我々の社会を急速に変えて来ました。その加速度的な進歩は、まさに驚嘆するばかりであります。しかし私達は、科学技術による素晴らしい恩恵に浴しながらも、今や科学万能指向の社会に対して疑問を抱き始めるようになり、また科学の進歩に恐怖さえも感ずるようになりました。輝かしい未来が約束されていた筈の現代科学文明にも、影がさし始めて来たのを感じずにはられません。では科学の進歩は止り衰退へと向かうと言えば、今のところそのようには見えません。寧ろ進歩するであろうとさえ思われます。

教育が現代の科学文明社会の構築に大きな力となって来たことには間違いありませんが、21世紀に向けて、今日の科学文明の軌道を修正し、より良い文明社会を出現させる事の出来るのもまた、教育の力によるほかありません。

3. 若者の姿は大人を映す鏡

学校における“いじめ”の問題、登校拒否の問題が大きく取り上げられております。また犯罪の若年化や犯罪の悪質化は、日々進行しているようにさえ思えてなりません。これには色々な原因が

絡み合い単純ではない事とは思いますが、これが学校教育と関わりのない問題であるとは、どうしても考えられません。教育に携わる者としては、この問題の重大さを深く認識し、真剣に対処すべきであると思います。

私達は、若者の社会を見るとき、自分達大人の社会が投映されているものとして、真剣に受け取るべきだと思います。

III. 教育を問い直す

1. 教育の目指すもの

色々なところに色々な人がいて、共に生きて行くのが人間社会なのであります。

人は、生きるための原動力をもち、それぞれ個性をもって生まれてきます。この個性をして如何に育て上げるかが教育に掛かっているのであります。たとえ生活や社会環境に恵まれない個人にあっても、生きる力を助け個性を延ばすために教育はあるのであって、教育は、まさに若者の自立を扶ける行為にほかありません。教育の目指すところは飽く迄も、次の社会がより良い社会であるように、次の社会を背負う若者を、立派に育て上げる行為そのものであります。

大人は若者の延長線上にあって、若者は次の大人であります。若者を教育する目標は、次に実現する大人の社会そのものなのであります。

2. 研究と教育

長年に亘り、大学における教育は研究であると言われてきました。かつての大学の様に、ごく限られた学生を対象にしていた頃は、研究を通して人間形成の教育もある程度可能であったかとも思われますが、今日の大学にあっては、研究の為の教育はあっても、人間形成の教育をここに求めることは無理であると思います。今日の大学においては、研究に熱中するあまり、教育は二の次となっております。このような環境下において、人間形成に関わる本来の教育を期待することは殆ど出来ないものと思います。この問題の解決は、今後大学教育における大きな課題の一つでありましょう。

3. 個性ある教育

人は、この世に生まれて人間として平等であります。このことは、一人一人の人間が持って生まれた色々な才能に違いがある事とは全く別のことであります。

人は、それぞれ自分の得意とするところを発揮し活躍してこそ、満たされた人生であったと感ずる筈です。創造性のある教育として、往々にして英才教育が取り上げられますが、必ずしもこれは創造的な研究や発見に結びつくものではないと思います。独創的な人物はいかなる環境のもとでも育つものであると言う考え方もありましょうが、個性を育てる社会環境また教育環境があつてこそ、創造性に富む人物も広範な分野に現われて、独創的な研究成果が大いに期待できると思います。此れ迄のような画一的な平等・平均化の教育の下では、国際的な競争場裡における創造的研究の出現は困難であると言わざるをえません。

学校の活気、そして社会の活気もまた、個性を尊重し協調しあう愛のある教育環境から、自ら生まれて来るものと思います。

4. 心の教育

今日の日本は、ある程度の物的豊かさを確保し、経済的には繁栄しているものの、心の荒廃が進み、モラルの低下が目立ちます。知識教育の重要性は今更言うまでもありませんが、知識教育を重視し、物的な豊かさの追及に専念している一方において、社会不安は次第に増えてきました。心の教育と言っても広範多岐に亘りますが、その必要性が今更ながら痛感されます。

いま世界では戦が絶えません。人間の歴史において、正義を唱え戦は繰り返されております。この現実を見るにつけ、戦を未然に防ぎ、真の平和を目指すには、心の教育こそ最も大切でありまして、心を鍛え、心の力を育てる修練を、どうしてもしなければならないと思います。

人間の言動は、全て心から発せられます。言動の原点となる心の在り方こそが大切で、最も重視しなければならない事なのであります。争いも平和も、また真の豊かさも、心の中に発し、心の中にあるからであります。

また社会は、罰則を強化したからといって必ずしも良くなるものではありません。今まさに、心の豊かさが最も求められており、それを必要としている時なのであります。

知識偏重の教育では、人間を正しい方向に進ませることは出来ません。どのような場合にあって、愛のある心の教育があつてこそ、若者は素直にして立派に育って行くのです。エリート教育においては、特に知識教育のみが協調され、心の教育は蔑ろにされ勝ちであります。このことは大きな間違いであることを改めて強調し、ここに注意を喚起いたします。

5. 社会道義の確立

総ての人は、平和で住みよい秩序ある社会をねがい求めております。それなのに、そのような社会はなかなか現われません。

物は豊かであっても、何時も恐怖を抱きながら暮らさねばならなかったり、また権利の主張において闘争に明け暮れるような社会には、人間の幸せは存在しません。

一人一人によって成り立っている社会、互いに手に手を取りあい、助け合い励ましあい、また競いあつて、はじめてそこに、活気のある良い社会が生まれて来るのです。社会は、お互い皆んなのものであります。住みよい暮らしやすい社会でなければなりません。そのためには、自分の権利を主張するだけではいけません。自分を大切にすると同時に、他人を尊重し協調しあつてこそ、はじめて良い社会が生まれてくるのです。

日本の社会は、犯罪が少なく安心して住める素晴らしいところです。このありがたい伝統を受け継いで、さらに社会道義に磨きをかければ、世界の羨望の的となり得るような社会の実現もまた夢ではないと思います。

6. 国の存立

国際化の進む中、特に経済では、国境を越しての交易が、今や世界の大きな流れとなっております。日本は敗戦という痛い経験を引かずして今日に至っているせいか、国民の国に対する意識の低さが痛く感じられます。東西の冷戦が終結した今日において、世界の各地では、民族の闘争が絶えず、国の独立を目指した悲惨な戦闘が繰り広げられております。このことは私達に、国というものの存在がいかに大切であるかを如実に教えてくれているものと思います。自分の国が立派な国であってこそ、はじめて自由が存在し、国に誇りが持てるのです。私達が国を愛してこそ、日本の国は益々素晴らしい国になって行くのです。

IV. むすび

これからの教育は、国の大きな教育方針と関わりますが、結局は全ての教育者自身にかかわる問題でありまして、教育する人そのものにあると言っても過言ではないかと思えます。

最後に、教育に携わる全ての者にとって、特に大切だと思われることを挙げてみました。

1. 教育の本質は、若者のために注ぐ愛の行為であって、いかなる教育も愛のある心でもってなすべきでありまして、見返りを期待すべきものではありません。さらに教育者には犠牲になる覚悟があつてこそ、真実愛の教育が出来るものと思います。本来若者は、教える者の犠牲の上に育って行くものであることを、はっきりと心に留めおくべきだと思います。
2. この世の中で一番難しく一番大切な仕事は、教育であると言っても言い過ぎではないと思えます。教育者は、驕りを戒め、心に秘めた真の誇りをもって、教育に当るべきだと思います。
3. 教育を正すと言うことは、教育者自身の心の姿勢を正す言うことであります。教育に騙しがあつてはなりません。教育者の心の姿勢こそ、教育に最も大切なことなのであります。

国際的に新しい立場に立った日本としては、躊躇することなく教育の流れを変えて進展しなければなりません。今こそ、教育の本質に立ち返って、改めるべきところは改め、我が国は勿論のこと、世界を視野に入れた活力ある教育を信念をもって推進すべきです。世界に誇れる教育を、日本の国から発しようではありませんか。

